



# グループ学習分科会情報

分科会再編で変わったことは、これまで小学校のメンバーが中心だったのが、中学校・高校のメンバーも加わったことです。さらに発達の見点が広がり、集団の高まりや、運動文化の主体者形成に向けたグループ学習の出口像など、議論が深まることが期待されます。



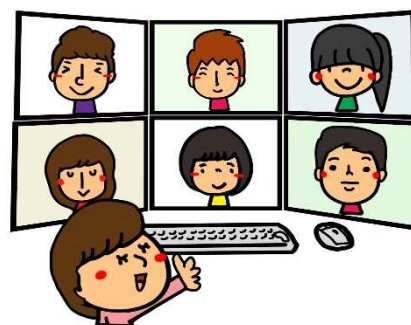
武蔵野大会では、宮城による基調報告に始まり、「同志会のグループ学習とは何か」が整理されました。同志会のグループ学習は、これまで「みんながみんなでうまくなる」ことを目指し、主に技能差を超えた教え合いを組織する学習指導論として語られてきました。近年では、子どもたちの技能差に加え、能力観や競争観といったものの見方・考え方の「ちがい」やその変容に着目した実践研究が進められています。「みんな」の学習権やスポーツ権を保障し合う民主的な学習集団を創出するためには、「ちがい」を前提にした相互承認が不可欠であり、矛盾や葛藤の顕在化とその集団的解決（民主的な

合意形成・価値判断)が重要となります。そのような実践を生み出す教師の洞察を支えるものは何か、「ともに意味を問い直す」学習課題はどのような子どもたちの実態と運動文化との出会いのなかで立ち現れるものなのか、これらを研究の焦点として検討していくことが提案されました。実践報告の1つ目は東京の先生による6年生の1年間を通したグループ学習の実践でした。過度な競争意識や排他的行動が蔓延る学級の実態を前に、能力差が表面化しづらい片足立ちや手押し相撲の学習を通して互いの「ちがいを知る」ことから始まります。その後、運動会の団体演技や走幅跳び、水泳を通して「良い動きにはポイント（技術・しくみ）があること」を知り、技術を通せば互いを受容し認め合えることに気づいていきました。技能差が顕在化する器械運動では「できない」を表明できるようになり、他者の願いに向き合えるようになっていきました。2学期の終わりには、5年生



で大きなトラブルを生んだリレーの学習に挑み、「できないことをさらけ出すのはメリットだらけだよ」という子どもの発言やバトンパスの技術を媒介とした学び合いの経験を通して、能力差や競争に対する意識が変容し「ともに学ぶ」関係が形成されていったことが報告されました。2つ目は、東京の先生による6年生フラッグフットボールの実践。戦術学習では役割をローテーションしていたにもかかわらず、リーグ戦になると、得点を目指して全チームが「QB固定」を採用。いつもブロッカーをしていたSの「私も点を入れてみたい」という発言を機に、子どもたちと役割分担（分業）のメリットやデメリットについて話し合いが行われます。役割分担（分業）こそ「一人ひとりの個性を活かせる」と考えていた子どもたちが、埋没していた「一人ひとりの願い」に気づいていったことが報告されました。3つ目は、広島先生による3年生の台上前転の実践。子どもたちにとって初めてのグループ学習でICTも活用。はじめは観察してアドバイスをする子がリーダー的な子どもに限られていましたが、動画を見合ったり体育通信（くるりんぱ）を読み合ったりして一人の考えを

みんなのものにしていくことで相互観察が活発になり、「わかる」「できる」を高



めていったことが報告されました。

みはま大会に向けて、基調報告、研究報告、実践報告を2つ決めました。10月にオンラインで学習会を実施し、11月はグループ学習をテーマとした東京支部例会とのコラボでフラフト実践に学び、12月は山梨支部例会とのコラボで、グループ学習についての提案に学びます。今後も基調提案や実践報告の方向性をすり合わせながら、夏大会に向けた準備を進めていきます。

みはま大会では、大会テーマ「ともに生きる」に大きくかかわる分科会として、子どもたちの声を丁寧に読み解き、世代や学校種を超えてともに学び合える分科会にしたいと思います。実行委員会のみなさまには大変お世話になりますが、よろしくお願ひします。